2025 年 10 月 16、17 日、広島国際会議場にて第 89 回全国学校歯科保健研究大会が開催されました。主題「口腔から全身の健康づくりを目指して」、副題は「学校歯科保健が育む学びと笑顔」です。

開会式、全日本学校歯科保健優良校表彰の後、青山学院大学陸上競技部監督である広島出身の原晋氏より特別講演「なぜ青学大は駅伝強豪校へと成長したのか～覚悟と挑戦～」が行われました。

【特別講演要旨】

元々、弱小チームであった青山学院大学駅伝部であるが、弱みを少しずつ改善し、強みはさらに強化していき、強豪校となることができた。

箱根駅伝は教育ツールであり、プロセスはスポーツも仕事も同じ。「逆算思考」が大事である。まずゴールを決めてそこに向けてどう準備していくか。一人一人が責任を持って行動することが必要である。一般的に最終責任は社長や校長、監督が取ることが多いと思うが、全て責任がそこにあるのはおかしい。立場でそれぞれの責任があり、その責任をそれぞれが全うすることにより組織がまとまることになる。

また 2025 年の箱根駅伝にまつわる裏話も聞くことができました。

【中学校部会】

まず初めにアドバイザーである日本大学歯学部衛生学講座の川戸貴行教授より導入発表がありました。

食べる機能、呼吸機能、話す機能の発達不全の兆候は、ほとんどが小学校の時点で見つけることができる。しかし、学校歯科保健において口腔機能発達不全の取り組みの歴史は浅く見逃されている場合もある。口腔機能発達不全に関する基本的な考え方によると、口唇を閉鎖する力の伸びは 3～5 歳と 12～15 歳の時期に認められている。これらのことから、学校保健関係者と生徒の両方が口腔機能に意識を向ける必要がある。

その後、研究発表がありました。

福山市立一ツ橋中学校からの発表

ライフスキル教育に力を入れており、それには「気づく→考える→選ぶ→行動する→振り返る」のプロセスがある。本研究ではローレンス W.グリーン、マーシャル W.クロイターの PRECEDE-PROCEED モデルを歯と口の健康教育に適用した。歯と口の保健教育によって働きかけるべき要因を 3 つのカテゴリーに分類した。「準備要因」、「実現要因」、「強化要因」。これら 3 つの要因全てに対してバランスの取れた働きかけが求められる。具体的な実践としては、①生徒会保健委員会の活動（全校生徒を対象とした歯磨き指導に取り組んだ）。②歯科医師、歯科衛生士との歯科保健の取り組み（1 年生を対象に保健学習を展開した）。③

校区小学校への生徒会保健委員会の出前授業（地域で歯と口の健康意識を高めることを目的として 6 年生を対象に実施した）。PRECEDE-PROCEED モデルを通じて、健康課題の優先度を評価し、因果関係に基づく支援対象を段階的に特定することはできたが、その成果や行動変容の評価については不十分であった。次年度以降は、行動・成果レベルの評価指標の明確化と実施に取り組みたい。

川口市立安行中学校からの発表

各教科と歯科保健教育を絡めた授業を行っている。理科では色々な生物の歯と人間の歯の共通点や相違点を学習した。国語では歯科保健に関する魅力的な提案をグループで考え、発表資料を作成し、プレゼンテーションを実施する。社会科では生肉を主食とする寒帯地方の人々はむし歯の患者がほぼゼロであったことを学習した。数学では歯科保健診断の結果からわかることを考察する。英語では災害時の口腔ケアについて学んだ。また、学校歯科医や歯科衛生士による教職員歯科保健研修を実施し、教職員一人一人の指導力の向上を目指している。生徒保健委員会では校内放送で、むし歯や歯肉炎、歯垢付着、歯石、要注意乳歯保有生徒に向けて、受診・治療の呼び掛けを行っている。これらの取り組みにより多くの生徒に意識・行動の変容が見られた。行った健康アンケートでは 1 日 2 回しか歯磨きをしない生徒が 23.7%であり、歯科医院を定期受診してない生徒がまだ 32%もいたので、家庭でのケアの重要性や定期健診・歯科医院への受診の必要性に対する理解を深め、家庭が主体のケアも習慣化するように支援していくことが重要である。

（山本崇　記）